様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６月　５日現在

機関番号：13901
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2008～2010
課題番号：20330133
研究課題名（和文）
認知と言語コミュニケーションの相互関連性に関する社会心理学的研究
研究課題名（英文）
A social psychological study of mutuality between cognition and verbal communication
研究代表者
唐沢 穣　（KARASAWA Minoru）
名古屋大学・環境学研究科・教授
研究者番号：90261031

研究成果の概要（和文）：実験社会心理学、発達心理学、文化心理学、言語学（語用論）などの研究方法を用いることにより、対人間や集団間に生じる葛藤の基礎となる言語コミュニケーションと認知過程との相互関連性を明らかにした。研究結果は、言語行為が当事者間の共通の期待や基盤に基づくものであり、認知過程もそれと相互規定的関係を持つことを明らかにした。対人間や集団・文化間の葛藤を解決するための方策を示唆するものであった。

研究成果の概要（英文）：An interdisciplinary approach based on experimental social psychology, developmental psychology, cultural psychology, and linguistics (pragmatics) has revealed mutual determination between verbal communication and cognitive processes which may underlie major conflicts in interpersonal and intergroup settings. The results of the study indicates that verbal acts as well as cognitive processes both rest on interactants mutual understanding of their common grounds. The results have also provided implications for practical strategies for resolving interpersonal, interegroup, and inter-cultural conflicts.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2009 年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2010 年度	2,800,000	840,000	3,640,000
年度			
年度			
総　計	9,400,000	2,820,000	12,220,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・社会心理学
キーワード：社会的認知・感情

１．研究開始当初の背景

今日の社会では、コミュニケーションを介した意思伝達における困難さが、さまざまな種類の葛藤や問題を引き起こしている。本研究は、対人間、そして集団や文化の間に生じる葛藤の原因となるミスコミュニケーションの心理的原因を明らかにするとともに、それらの問題を解決のために有効に働くコミュニケーションの条件を明らかにすることを目的とした。併せて、社会的領域における人間の認知・行動と、言語コミュニケーションとの間の相互影響関係を明らかにすることを目標とした。

社会心理学研究の研究は、言語の働きに大いに依存している。にもかかわらず、言語の作用に関する系統的な理解が十分にな

されないままに「認知過程」や「社会的相互作用」が議論されてきたことは否定できない。対人認知、原因の推論、他者の意図の推論と責任追及、集団過程とコミュニケーションの関係など多くの研究分野において、言語の働きと認知過程の相互規定的な関係を考慮した、新しい枠組みと研究方法を得ることが必要であると考えられる。

２．研究の目的

上記の現状認識をもとに本研究では、主に(1)対人認知と集団認知、(2)原因・意図の推論と責任判断、(3)対人葛藤の解決と宥和的関係の構築、の各領域における心理過程と言語使用との相互関連性を明らかにすることを目的とした。言語的表象および言語表現がどのように心理過程を反映するかを吟味する一方、言語の使用が認知過程や行動を規定する役割をも持つことを明らかにすることを目指した。さらに、この相互規定性が、コミュニケーションを通じて伝播され、文化的に共有される過程を解明することを試みた。

３．研究の方法

主な研究方法として、社会心理学実験、発達心理学的な観察実験、そして実験法をベースとした文化心理学研究の方法を用いた。

対人認知、集団間認知の実験では、状況設定を描いたシナリオを呈示し、その場面中での言語使用を尋ね、これとシナリオ内容に関する記憶や判断との関連を分析するという方法を用いた。また、背景知識の共有性（「共通基盤」）のコミュニケーションにおける役割を調べるために、情報伝達場面における言語使用と認知指標の分析を行った。さらに、発達心理学的研究では、「心の理論」研究に範を取った、「誤信念課題」を用いた実験などを用いた。

テーマごとの主な研究担当者は以下の通りであった。

- 原因と責任の推論、人物・集団評価と言語との相互関係：唐沢、岡本、吉成（平成 22 年より）
- 伝達行為、発話行為と認知表象：唐沢、岡本、宮本
- こころの理論と意図性認知の発達：松井、唐沢
- 認知と言語の文化的基盤：内田、吉成、唐沢

４．研究成果

（１）原因推論および他者評価と言語行為との関係を明らかにするため、特に動詞の他動性が原因推論に与える影響に焦点を置いて実験研究を推進した。同一の事象を「壊れた」「壊した」のように自動詞・他動詞のいずれを用いて表現するかによって、発話者の原因知覚、およびそれに関する聞き手の推論内容が変化することを示すための実験を行った。その結果、自動詞文に比べて他動詞文では、行為者の意図性、統制可能性、責任などがより強く認知されることが明らかになった。すでに Fausey & Boroditsky (2011)らによって示された現象の基礎にある過程をより詳細に明らかにしたと言える。

（２）発話行為と認知過程の関連についての研究として、言語的コミュニケーションにおける言語形式と伝達内容の理解か対人関係に及ぼす影響を調べた。特に「皮肉」の構造とその効果に重点を置いた検討として、発話のバレンス（ポジティブ、ネガティブ、あいまい）と、状況のバレンス（ポジティブ、ネガティブ、バレンス）を組み合わせて操作した実験を行った。結果は、皮肉の程度は発話と状況の相互作用による不誠実性によって規定されることを示した。

（３）伝達行為に関する研究では、背反する 2 種類の情報（レジ袋有料化賛成・反対情報）のいずれかを実験参加者に提示し、背反情報を持った参加者同士にコミュニケーションをさせた。コミュニケーションによって、当該情報に対する態度がどのように変化するかを検討したところ、参加者は相手の情報にある程度歩み寄る形で当該情報に対する態度を変化させることが示された。しかしながら、その後参加者が第 3 者に向けて発した情報（伝達情報）を第 3 者に評定させると、伝達情報の中身は背反情報提示直後に示された態度と近似することが示された。このことからコミュニケーションは背反的態度の中和効果があるものの、伝達行為によって、旧来の背反態度に沿った情報伝達が行われる可能性があることが本実験によって示された。本研究の結果は、伝達状況を用いた実験パラダイムが、複雑な認知過程を解明するためのツールとして用いることの有用性を示した点でも意義深い。

（４）責任知覚と伝達行為研究を統合するものとして、他者に情報伝達するという目的をもって処理する際に現れる効果を検討した。実験題材として、刑事被告人の人物像と行為に関する情報を用い、他者への伝達あるいは自身のための理解という、情報処理目標を操作した。結果は、伝達目標のもとでは、受け手との共通基盤に則り、しかも受け手の理解

を促すような内容の変化が行われること、そして伝達者本人の原因推論にも再帰的な影響が見られることを示した。原因推論や属性推論が、個人内の情報処理過程だけに依存するのでなく、共有的理解の構築に基づいていることを示唆する結果である。

（５）意図性認知が個人だけでなく集団による行為についても行われることを示す実験的研究を行った。集団の反規範的行為に関する記述において、集団に意思決定機能を持つ下位集団が存在する場合には、行為に関する説明において、集団レベルでの欲求や信念の想定に基づく「理由説明」が多用されることを示す結果が得られた。これは、個人と同様に集団の行為に対しても「心の理論」が発動され、その説明の基礎となっている可能性を示唆する。他者の心的状態に関する推論と、その指標となる言語行為との関連が明らかになった。

（６）心の理論の役割について、発達心理学的観点からの分析を行うため、誤信念課題を用いた一連の実験研究を行った。そこでは、3歳児において会話を通した他者の心的状態に関する理解が形成されていることを示唆する結果が得られた。これと並んで、終助詞の使用を比較した発達心理学研究にも大きな進展があった。特に 3 歳児では、高い確信度を示す話者に対して強い信頼を示すのに対し、5歳児では母親と他者との間で弁別が行われていることを示唆する結果が得られた。

（７）コミュニケーションの機能を支える文化的基盤の検討として、①シナリオ実験、②状況サンプリング法、③ペア実験のそれぞれの方法を用いた実験研究を行った。その結果、ヨーロッパ系アメリカ人ではより明示的なコミュニケーションが望ましいと考えられるのに対して、日本やアジア系アメリカ人においては、より間接的で言語化しないようなコミュニケーションをより望ましいと考えられていることが明らかになった。言語とコミュニケーションの持つ、通文化的特徴と文化固有の特徴の両方を示す研究結果となった。

（８）認知過程だけでなく、感情機能と言語との関係を明らかにするため、集団間の敵意や赦しなどの感情に与えるコミュニケーションの影響についての研究を行った。加害集団と謝罪者との関連性（距離）に関する認知が重要な影響を持つことが明らかになった。言語コミュニケーションの分析が集団間葛藤などの現象の基礎過程の解明に適用できることを示した点で意義深い。また、今後さらに新しい研究を生み出す可能性を持つ結果と言える。

（９）以上の研究結果のうち主要な成果を公表するため、日本心理学会第 74 回大会において、ワークショップ「ことばと社会」を開催した。心理学、言語学、工学など多くの分野からの出席者があり、新たな学際研究を拓く試みとしてインパクトを持つものとなった。この他、日本語教育学会等の学会でシンポジウムやワークショップを開催したほか、研究分担者との研究会を頻繁に開催することにより、さらなる学際的協働を推進した。

（１０）本研究課題によって得られた成果をもとに新たな研究の展開を試みるため、最終年度申請において平成 23～25 年度・基盤研究(B)「良好な対人関係を築くコミュニケーション方法の考案：言語心理学モデルの構築と応用」が採択された。研究成果は着実に蓄積・展開されている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 13 件）

① 寺前桜、唐沢穣、集団の行為に対する意図性認知—自由記述による説明内容の分析、人間環境学研究、査読有、6 巻、2008、35-41
② 岡本真一郎、認知，言語，コミュニケーション：最近の研究の展望、愛知学院大学論叢心身科学部紀要、査読無、４巻、2008、27-33
③ 内田由紀子、文化と感情：比較文化的考察と組織論への意義、組織科学、査読無、４１巻、2008、48-55
④ 菅さやか、唐沢 穣、服部陽介、情報伝達という目標が社会的事象の原因説明に及ぼす効果、社会心理学研究、査読有、25 巻、2009、21-29
⑤ Matsui, T., Rakoczy, H.,Miura, Y., & Tomasello, M.、Understanding of speaker certainty and false-belief reasoning: A comparison of Japanese and German preschoolers、Developmental Science、査読有、12 巻、2009、602-613
⑥ 岡本真一郎、皮肉伝達における過大評価－受け手と傍観者の比較－、愛知学院大学心身科学部紀要、査読無、5 巻、2009、25-30
⑦ Tsukamoto, S., Gonzales, V., & Karasawa, M.、Challenging Canadian

multiculturalism: Lay perceptions of Canadian national identity.、Journal of Human Environmental Studies、査読有、8巻、1号、2010、24-31

⑧ 菅さやか、唐沢穣、コミュニケーション場面における社会的文脈の知覚が情報伝達に与える影響、人間環境学研究、査読有、9巻、2011、21-26

⑨ Goto, N., & Karasawa, M.、Identification with a Wrongful Subgroup and the Feeling of Collective Guilt、Asian Journal of Social Psychology、査読有、14巻、2011、225-235

⑩ Senju, A., Southgate, V., Miura, Y., Matsui, T., et al.、Absence of spontaneous action anticipation by false belief attribution in children with autism spectrum disorder.、Development and Psychopathology、査読有、22巻、2010、353-360

⑪ Uchida, U.、A holistic view of happiness: Belief in the negative side of happiness is more prevalent in Japan than in the United States.、Psychologia、査読有、53巻、2010、236-245

⑫ 松井智子、言語研究とコミュニケーション教育-認知語用論からの提言、日本語学、査読無、30巻、1号、2011、25-39

⑬ 内田由紀子「日本文化と思いやりの諸相——比較文化研究から見えてくること」岩波『科学』査読無 81巻，1号，pp 51-52,2011.

〔学会発表〕（計32件）

① Karasawa, M.、Causal attribution, language use, and the perception of responsibility.、European Association of Experimental Social Psychology.、2008年6月11日、クロアチア・オパティヤ市

② Uchida, Y., Kitayama, S., & Mesquita, B. (2008). Culture, self, and friendship: Reciprocity monitoring in Japanese and American contexts.（Symposium "Cross-cultural differences and similarities"）20th Annual conference, Human Behavior & Evolution Society, 2008. 6. 7. Kyoto University

③ Karasawa, M.、Transmission of stereotype-relevant information in communicative contexts. Invited symposium presentation、32nd Annual Scientific Meeting of International Society of Political Psychology、2009年7月14日、トリニティ・カレッジ（アイルランド、ダブリン市）

④ 内田由紀子 サポートの授受における文化心理学的パースペクティブ（ワークショップ『文化と進化とこころの未来』）日本心理学会第72回大会 2008年9月19日北海道大学

⑤ Tsukamoto, S. & Karasawa, M.、Understanding interpersonal differences: Perceptions of ethnic categories in relation to essentialism、Society for Personality and Social Psychology the 11th Annual Meeting、2010年1月28日、Las Vegas, Nevada

⑥ Tsukamoto, S. & Karasawa, M.、The influence of social context on essentialist beliefs: Exclusivity perception of ethnic categories、Society for Personality and Social Psychology Pre-Conference: Group Processes and Intergroup Relations、2010年1月28日、Las Vegas, Nevada

⑦ Seo, Y., & Karasawa, M.、The Influence of Interpersonal Skills and Group Commitment on Identity Formation、Society for Personality and Social Psychology the 11th Annual Meeting、2010年1月29日、Las Vegas, Nevada

⑧ Goto, N., & Karasawa, M.、Social Eyes Modify the Relationship between Subgroup Identification and the Feeling of Collective guilt、Society for Personality and Social Psychology Pre-Conference: Group Processes and Intergroup Relations、2010年1月28日、Las Vegas, Nevada

⑨ Goto, N., & Karasawa, M.、Fairness of the Action as a Consequence of Identification and Antecedent of the Feeling of Collective Guilt、Society for Personality and Social Psychology the 11th Annual Meeting、2010年1月30日、Las Vegas, Nevada

⑩ 塚本早織、唐沢穣、ステレオタイプ的「カナダ人」像を規定する社会的要素、日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第56回大会合同大会、2009年10月11日、大阪大学

⑪ 岡本真一郎、皮肉伝達における透明性の錯覚－表現の不誠実性の効果－、日本社会心理学会 50回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第56回大会合同大会、2009年10月11日、大阪大学

⑫ 宮本聡介、背反情報のコミュニケーションとその伝達 - 初期情報の優位性- 、日本社会心理学会 50回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第56回大会合同大会、2009年10月11日、大阪大

学
⑬ 唐沢穣、脳神経科学の発展と社会心理学、日本社会心理学会 50 回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第 56 回大会合同大会、2009 年 10 月 10 日、大阪大学
⑭ 徐侑里、唐沢穣、対人スキルがアイデンティティの確立に及ぼす影響 ーコミットメントの役割に着目してー、日本社会心理学会 50 回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第 56 回大会合同大会、2009 年 10 月 10 日、大阪大学
⑮ Karasawa, M. 、Perception of responsibility and the use of language: Implications from a Japan-France comparison.、Invited symposium at the 1st International Conference on Indigenous and Cultural Psychology、2010 年 7 月 25 日、Yogyakarta, Indonesia
⑯ Goto, N., & Karasawa, M.、Perceived fairness of the ingroup act or concerns for reputations: Determinants for the feeling of collective guilt.、The 13th Biennial Conference of the International Society for Justice Research、2010 年 8 月 22 日、Banff, Alberta, Canada
⑰ 唐沢穣、心理学から見た他動詞文研究の意義、第 11 回日本語文法学会、2010 年 11 月 7 日、就実大学
⑱ 岡本真一郎、ことばと社会：心理学的アプローチの可能性と問題点、日本心理学会第 74 回大会、2010 年 9 月 20 日、大阪大学
⑲ Matsui T. & Miura, Y.、Three-year-olds are capable of deceiving others in the pro-social context but not in the manipulative context 、Biennial Meeting, Society for Research in Child Development、2011 年 3 月 31 日、Montreal, Canada
⑳ 松井智子、会話が心を育てる一幼児期のコミュニケーションと社会性の発達、東京都私立幼稚園連合会 教育研究大会基調講演、2010 年 7 月 21 日、東京
21 松井智子、心の理解とコミュニケーション：認知語用論と発達心理学、日本心理学会第 74 回大会、2010 年 9 月 20 日、大阪大学
22 内田由紀子、文化とコミュニケーション：文化心理学の立場から、日本心理学会第 74 回大会、2010 年 9 月 20 日、大阪大学
23 松井智子、心の理解と言葉の理解の発達的相互作用について、日本第二言語習得学会研修会講演、2010 年 10 月 3 日、中央大学
24 吉成祐子、言語使用における文化的背景とのかかわり、日本心理学会第 74 回大会、2010 年 9 月 20 日、大阪大学
25 パルデシ・プラシャント、吉成祐子、他動性と意図性の相関関係、第 11 回日本語文法学会、2010 年 11 月 7 日、就実大学
26 鄭聖汝、吉成祐子、非意図性と他動詞文の相関関係－意味的他動性と統語的自他のはざまでー、第 11 回日本語文法学会、2010 年 11 月 7 日、就実大学
27 Eggen. A., Miyamoto, Y., & Uchida, Y. (2011). “Expressing versus Sensing through Non-Direct Communicative Means.,” Cultural Psychology Preconference, The 12th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, 2011. 1. 27. San Antonio, USA.
28 Goto, N. & Karasawa, M. Effect of perpetrator group's guilt expression and intragroup similarity on guilt assignment from victim group. The 12th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology,2011.1.29 San Antonio, Texas, USA.
29 Tsukamoto, S., Suga, S., & Karasawa, M. (2011). The influence of pscyhological essentialism on inferences about gender category: the case for 'citizen-judges'. The 12th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology, 2011.1.29 San Antonio, Texas, USA.
30 Tsukamoto, S., Enright, J., & Karasawa, M. The influence of in-group essentialist beliefs and in-group identity on attitude toward an out-group. Pre-Conference of The 12th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology: Group Processes and Intergroup Relations, 201.1.27 San Antonio, Texas, USA.
31 Asai, N. & Karasawa, M. (2011). Impact of essentialist beliefs on consensus estimation. The 12th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology, 2011.1.29 San Antonio, Texas.
32 パルデシ・プラシャント、吉成祐子、鄭聖汝、他動性と意図性に関わる言語表現使用の検証－日本語とマラーティー語の対照研究および日本語教育への応用、The seventh International Conference on Practical Linguistics of Japanese、

2011 年 3 月 5 日、San Francisco, USA

〔図書〕（計５件）

① Karasawa, M., & Suga, S.、Lawrence Earlbaum Associates、*Stereotype dynamics: Language-based approaches to stereotype formation, maintenance, and transformation* (pp. 241-262).、2008、408

② ·Karasawa, M., & Maass, A. The role of language in the perception of persons and groups. In R. M. Sorrentino & S. Yamaguchi (Eds.), Handbook of Motivation and Cognition Across Cultures (pp. 317-342), San Diego, CA: Academic Press.　2008、624

③ Fitneva, S. & Matsui, T. (Eds.)、Jossey-Bass、Evidentiality: A Window into Language and Cognitive Development, New Directions for Child and Adolescent Development、2009、112

④ 唐沢穣、北大路書房、村田光二（編）『現代の認知心理学６　社会と感情』（pp.248-272）、2010、305

⑤ 岡本真一郎、ナカニシヤ出版、ことばの社会心理学（第４版）、2010、273

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

〔その他〕ホームページ等

http://www.psy.sis.nagoya-u.ac.jp/klab/index.html

６．研究組織

(1)研究代表者

唐沢 穣（KARASAWA Minoru　）
名古屋大学・大学院環境学研究科・教授
研究者番号：90261031

(2)研究分担者

・岡本真一郎（OKAMOTO Shin’ichiro）
愛知学院大学・心身科学部・教授
研究者番号：80191956

・宮本聡介（MIYAMOTO Sousuke　）
常磐大学・人間科学部・准教授
（H.21 明治学院大学・心理学部・准教授）
研究者番号：60292504

・松井智子（MATSUI Tomoko）
京都大学・霊長類研究所・准教授
研究者番号：20296792

・内田由紀子（UCHIDA Yukiko）
京都大学・こころの未来研究センター・助教
研究者番号：60411831

・吉成祐子（YOSHINARI Yuko）
岐阜大学・留学生センター・准教授
（H.22 より）

(3)連携研究者　該当なし